

薬と関係のない話: 黒猫ものがたり



かつて長年暮らしていた家を引っ越すことになった時、最後の日に何もなくなった家の最終点検をしていると、幼かった子供達との思い出もさることながら、至るところの壁紙がささくれ立ち、めくれ、黒ずんでいる部分さえあるのを見て、改めて、この家で19年4カ月暮らした猫がいたことを思い出した。全身黒い毛で覆われていたので名前は「クロ」だった。

1) 出逢い

ある日、仕事を終えて玄関戸を開けると目の前に金網をかぶせた箱が置いてあり、中をみると2匹の子猫が「ニャー、ニャー」と小さな声を上げていた。「なんじゃ、これは!」というのが私の第一声だったような気がする。小学1年生になって間もない娘が近所にいた捨て猫を見つけ、あまりに可愛いの隣に住んでいた祖母に頼んで連れ帰ってきたという。「飼ってあげましょうよ」と孫娘をかわいがる母の願いを私は断れなかった。母は無類の動物好きで私も幼い頃から動物と慣れ親しんできたせいもあった。大人の手の平に一匹が丁度乗る位の小さな猫たちだった。娘は黒い猫を「クロ」、茶系縞模様の猫を「タマ」と名付けた。しばらく2匹とも我が家で飼っていたが、成長してから、けんかが絶えなくなり「クロ」を我が家で、「タマ」を父母の家で飼うことになった(後年、父が死に母が施設に入ってまもなく、タマは家を脱走して行方不明となったので、以下はクロの話になる)。

2) 猫は意外と賢かった!

我が家の玄関は広めだったので、そこに猫用のトイレを設置した。ちゃんと所定の場所でトイレをさせるのにどれだけ時間がかかるのか不安だったが、1、2回粗相をした尿などの臭いとトイレを関連付けさせると自分たちからトイレに行くようになったのには驚いた。「猫は意外に賢い!」と実感した瞬間だった。そして、犬のように「お手」とエサを前にした「待て」を覚えさせると、ちゃんとできるようになった。野良猫あがりだったのを家猫として育てるつもりだったが、そのうちアルミサッシの窓の留め具を巧みに倒し、さらに窓の戸をくいと手で開けて、少し開いた窓から外へと出て行くようになりだした。留め具についているストッパーをしても巧みに外して外出する。外へ出たい願望からやたらと窓際でジャリジャリとひっかき回すとストッパーを含めた留め具が解除され、かつ窓を開いて外へでて行けることを学習できたのだ。クロがたまたま見つけた行動なのか、我々の動作を見て「外に出られる」と思って覚えた技なのか…ともかく猫の頭の良さを実感した。そんなクロだったので、家の洋間のドアのハンドル形式の取っ手は当たり前のように飛びついて開けるし、和室のふすま戸や障子戸は手でくいくいやりながら開けるので、家中どこでも行き放題だった。さすがに防犯の意味も含めて、それはイカンだろうとサッシ窓には泥棒よけの固定具をセットし、入ってこられて困る部屋のふすま戸には侵入防止用のフックまで仕掛けなければならなかった。

3) 傷ついた動物は静かに休息する

クロが自由に外出していた時期、クロが雄猫だったせいか、外のやんちゃ猫とよくケンカをして戻ってきていた。ある日、耳の一部を剥ぎ取られ、かつ全身血だらけで戻ってきたことがあった。当時、あてがわれていたケージに自ら入っていき、食事には目もくれずひたすら自分の寝床で静かに眠っていた。これが傷病の基本的治療法だと私は納得した。とにかく体を休息させひたすら体力の回復を待つという

手段は動物が本能的に身につけた治療法のようなのだ。薬という物質は動物の本来もつ治癒力を補佐するに過ぎないものなのだとつくづく思ったできごとだった。クロが絶対に外に出られないような工夫をして完全なる家猫にしたのは、このような事件があったからだった。

4) 猫は爪とぎをしたがる！

若き頃のクロはよく廊下を駆け回った。時には天井近い壁紙にも駆け上がり暴れまわる。当然、壁紙は傷つく。おまけに猫は爪とぎをする。特に壁の角やソファの角の布を集中的に攻撃する習性あるようだった。マタタビ入りの専用の「爪とぎ道具」を与えてもしばらくはうっとりとしてそれに夢中になるが、壁紙への爪とぎを止めようとしないうちに、さらにくねくねと体をこすりつけるので壁紙自体が黒っぽくなっていく。おまけに臭い付けと言われるシュー！もある。さすがにこれもいかんと去勢手術をしてからはこの臭い付けはなくなったが、異臭はしばらく残ったままだった。もう1匹の拾い猫のタマも両親の家で高価なソファースセットをボロボロにしていた。テレビで可愛い猫の紹介をしている人たちがいるが、部屋の壁紙はボロボロなんだろうなあと思いながら見ている。クロが亡くなってずいぶん経つが、家を引越すにあたりまざまざと残る猫の痕跡だった。もう一つあるある出来事を紹介すると猫は舌を使ってよく毛づくろいをする。そして胃の中でまとまり毛玉になった自分の毛を不定期に吐き出す習性がある。それが食後に重なりとゲーゲーと形を保ったままのキャットフードと共に毛玉を吐き出す。もつとゆっくりと喰えばそんなことにならないだろうと声をかけてもニャンともならなかった。

5) ネコの気分しだいで結構なついてくれる

「クロ」と呼びかけても来てくれない時が多かったが、たまに来てくれることもある。膝にのってくつろいでいる時もある。寝ている時は必ずと言ってよいほど布団の中に入ってくる。私の寝所には入って来られないようにしていたので基本的に娘の部屋に入って一緒に寝ていたようだ。冬場は居間のこたつの中で終日くつろぎ、喉が渇くと水を飲み、廊下においてある水場にのそのそと向かい、また戻ってきてはこたつの中で暮らしていた。しかし居間の戸は開けるが閉めることはしないので、いつも人間が寒さ対策で閉めにいかねばならなかった。それでも「ニャー」と言いながら相手をしてくれると可愛いものだった。

6) 老いてもなお自分をつらぬき通そうとする

十年以上も過ぎてくると老いも目立ち始める。まず角膜が白く濁りだしてきた。いわゆる白内障だろうが特に獣医に診せることもしなかった。室内猫と化した「クロ」にとって家の中はぼやけて見えていても本能的に色々な場所を理解していた。トイレに行きたい時はちゃんと玄関のトイレまで行ってしてくれる。しかし19歳前後になるとあやしくなってきた。足取りもヨタヨタとなり明らかに老化現象が進んでいた。それでもヨタヨタとちゃんとトイレに行っていたが、やがて途中でお漏らしをするようになってきた。尿意や便意に対する歩行能力が追いつかないのだ。それでもトイレに行こうとする姿は健気だった。やがて居室にいと廊下でバタンと物が倒れる音がしだした。足もと不如意の「クロ」がバランスを崩して倒れていた。それでもヨロヨロと立ち上がりトイレに行こうとする。

やがて廊下で横たわったままのクロを発見する。当時は妻と娘の三人暮らしだったが、皆仕事をもっており帰宅後に発見した形となったので、何時に亡くなったのかは分からなかった。

近くの動物の葬儀屋で茶毘にふすことになった。とても僧侶とは思えない従業員のおばさんが僧衣を着て「般若心経」を唱え出す。推定年齢は19歳4カ月、人間に換算すると93歳の爺さんになる。私の父や母よりも高齢で召されていった。

「クロ」がいなくなってから、2年ほどしてから「セキセイインコ」を飼いだした。私の今の年齢で猫や犬を飼うと、もし彼らが20年近くも生きると我々が認知症になって飼育放棄状態になるかもしれないからと思つての鳥さんの選択だった。

(終わり)